

〔續近世崎人傳二〕松岡恕庵

恕庵松岡氏略○中ある日奴僕を呼びて、蠟燭の屑をえり出して、是は某、これは誰に取らせよとわ

かち、すこしかたちあるを皆殘し置れけるを、かたはらの人、今奴に蠟燭の屑を給ひしは、何事に候やと問、先生鬢つけの爲也と答へらる、

〔製油録下〕白まぼり油の事

往古ハ木の實の油にて、鬢附をねり貝に入て賣しよし、それも都會の事にて、諸國にては鬢葛といへるものをとりて水に浸し置ば、其水ねばりたるものとなる、多く是を付て、紙のこよりにて髪をゆひ、田家にては藁をもて結たるよし、傳承りぬ、其時は櫛はじみ實と云ものなく、漆の實より榨たる蠟を用し也、寶曆の頃より櫛實を採、漆實同様の生蠟とする事を覺しより、種子油の白絞を日に晒し、櫛蠟の晒たるに交へ、今のごとき鬢付とする事とはなりぬ、明和安永の頃、菜種子油の早晒を泉州堺に於て仕始しより、浪華にうつり、今は世間一統早晒の油而已を用ふる事となりけり、又當世髪にぬる梅花油も、此晒あぶらに匂ひをつけたるものなり、この晒し油、梅花油ともに大坂製を極上品とする事なれば、諸國にても大坂製を用ひ給へかし、

〔歷世女裝考四〕塗髻膏の沿革

すき油も古くありし物とみえて、元祿十二年板、初音草嘶大鏡はやる物をいひたてる所に、萩野澤の丞がすき油女形なり○中略 俳諧菊枕寶永二湯あがりの縮に匂ふすき油付網の魚とてかね親の文、

油壺

〔類聚名物考調度十〕油壺 あぶらつぼ

〔雅亮裝束抄二〕わらは殿上のこと

あぶらつぼにあぶらわたいれて、○下略